

聖書:ダニエル書9章20～27節

説教:油注がれた者が断たれる

はじめに

紀元前605年にエルサレムがバビロンの軍隊に包囲されたとき、エルサレムの神殿は荒らされ、主だった人々はバビロンに強制的に連れて来られたとき、その中にダニエルも含まれていました。荒れ果てた神殿は復興するのか。信仰の根幹に関わることで、ダニエルはずっとそのことを知りたいと願って祈り続けます。そんなあるとき彼は幻を見るのですが、御使いガブリエルに幻の意味を教えてください。肝心の自分の知りたいことが知らされない。それで彼は高齢であったことも重なって、体調を崩してしてしまいます。

そのようなことがあってから、あるときダニエルは預言者エレミヤが書いた手紙を手にする事になり、それを読むと「エルサレムの荒廃の期間が七十年である」と書かれているのを見つけます。まさに長年探し求めていた答えがここにありました。彼は早速断食をし、荒布をまとって灰をかぶり、主に祈り求め始めます。数えてみると、バビロンに連れて来られてから六十六年の月日が流れていました。それが前回までのあらすじです。

今日はダニエルの所にやって来た御使いガブリエルがどんなことを語ったのか。そのことを見ながら神の救いのご計画について考えてまいります。

## 1 ダニエル

### 1) 「あなたがた」とは誰か

彼がエレミヤの手紙を読んで、悔い改めの祈りに導かれたのには理由がありました。エレミヤの手紙に続きに、「あなたがたが私に呼びかけ、来て、わたしに祈るなら」と書かれていたのです。でも、「あなたがた」とはだれなのか。ダニエルは考えました。自分は、日に三度の祈りを欠かさず、信仰を守り通してきたと思っていました。イスラエルが滅んだのは、自分以外のユダヤ人が神にそむき続けた、彼らの罪のためである。そんなふうには、自分と他のユダヤ人を区別していません。ですから最初「あなたがた」と言われても、これは自分ではないと思った。でも、本当に自分には罪がないのか。そう思い込んでいたことこそ罪ではないのか。自分も含めてユダヤ人全員が神の前に罪ある者ではないか。そうしたら「あなたがた」とは、ここには自分も含まれる。そう迫られたと

き、彼は自分の罪と同胞ユダヤ人の罪をのために祈り始めます。

### 2) 特別に愛されている者

そのとき思いがけないことが起きました。22節。「彼（ガブリエル）は私に悟らせようとしてこう告げた。『ダニエルよ。私は今、悟りによってあなたを賢明にさせようとして出て来た。』」

「悟らせようとして」あります。でもこれはおかしいですね。ダニエルはエレミヤの手紙を読んで、もう十分に悟ったはずではなかったのか。でも、ガブリエルはそれでは足りない、もっと悟るべき事があると言う。いったいどんなことを悟らせようとしたのか。

その前に一つだけ確認しておきます。ガブリエルがわざわざダニエルを選んだ理由は何か。23節でこう語っています。「あなたが特別に愛されている者だからだ。」

「あなたは神から特別に愛されている者である。」こう言われたらだれでも幸せに感じるでしょう。でもすぐに不安になります。「私はダニエルのような信仰者ではないので、絶対に無理。」考えてみましょう。なぜダニエルはこれほど高い評価をいただいたのか。ちゃんと書いてある。20節。

「私がまだ語り、祈り、自分の罪と自分の民イスラエルの罪を告白し、私の神の聖なる山のために、私の神、主の前に伏して願いをささげていたとき、」ガブリエルが来た。自分の罪と自分の民イスラエルの罪を告白していた。その真っ最中です。私たちは罪人です、と祈った。それだけです。何か特別に素晴らしいことをしたからではない。神を信じているのなら、誰もが祈ります。もし祈るならば、誰もが特別に愛されている者となる。

## 2 ガブリエルが語ったこと

### 1) 背きをやめさせ、罪を終わらせ

さて、ガブリエルは何を語ったのか、です。24節で「あなたの民とあなたの聖なる都について」告げるのだというところを読み、私たちは予想します。この後ガブリエルは、ユダヤ人とエルサレムがどうなるのかを詳しく語るはずだ。ところがどうも様子が違う。24節。「あなたの民とあなたの聖なる都について、七十週が定められている。それは、背きをやめさせ、罪を終わらせ、咎の宥め

を行い永遠の義をもたらし、幻と預言を確証し、至聖所に油注ぎを行うためである。」

幻ですので、七十週が具体的にどのような期間を指すのかはわきに置いといても、これがあなたの民と聖なる都とどんな関係があるのか。にわかに結びつきません。でも、「背きをやめさせ、罪を終わらせ、咎の宥めを行い永遠の義をもたらす」のは誰かと考えてみると、これは人ができることではない。もしかしてこれはイエス・キリストを指しているのではないか。そんなふうに思いつきます。

### 2) 油注がれた者、君主が来る

本当にそうなのか。25節でも同じことが言えるのでしょうか。「それゆえ、知れ。悟れ。エルサレムを復興し、再建せよとの命令が出てから、油注がれた者、君主が来るまでが七週。そして苦しみの期間である六十二週の間、広場と堀が造り直される。」

「油注がれた者、君主」とは、あきらかにイスラエルの王のことを指します。そうしますと、イエス・キリストもイスラエルの王として来られましたから、確かに辻褄が合います。

### 3) 油注がれた者が断たれる

では26節前半はどうでしょうか。「その六十二週の後、油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。」

六十二週が何を指すのかはわきに置いて、君主である油注がれた者が来たのに、彼は断たれてしまう、何も残らない。これが何を意味するのか。説明しなくても、もうおわかりでしょう。私たちは、主が十字架で苦しみを受けられ、殺されたことを知っています。そのことを指している。

ガブリエルは、悟りによってダニエルを賢明にさせようとして出て来たと言いました。その内容というのは、イエス・キリストのことだった。私たちは「悟り」とか「賢明になる」と聞くと、限られた人にしか知ることのできない特別な知識であるとか、頭がよくなることとか、そんなことを想像します。でも、ガブリエルが語ったことは、私たちにとって真新しいことでも何でもありません。よく知っていることです。そうしますとこうなります。私たちの罪を終わらせるためにキリストが十字架で殺され、よみがえられる。これは非常に特別な知識であって、私たちは特別に愛されているがゆえに、この知識を、聖書と教会を通して教えられた、ということではないのか。もしそ皆さんがキリストの

十字架を知っているのであれば、皆さんは神から特別に愛されているという証拠ということになります。

## 3 終末の時

### 1) いつのことか

このようにガブリエルは、ダニエルの時代から数えればおよそ五百四十年後に来られるイエス・キリストについて語ったことは分かりました。しかし、ガブリエルが語ったのはそれだけではありません。26節後半と27節が続きます。「次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」

このなかの「次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する」は、紀元70年にローマ帝国がエルサレム神殿を破壊したことを指すと言われます。ですから私たちから見れば既に起きた事柄になる。しかし次の「その終わりには洪水が伴い」以降に書かれていることは、いつのことなのでしょう。

### 2) 荒らすものが立つ

実はこのことについて、イエスがマタイの福音書24章で触れてくださっています。弟子たちが、「あなたが来られ、世が終わるときのしるしは、どのようなものですか」とイエスに尋ねたとき、こう答えます。15, 16節。「それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。」

大きな自然災害が起き、戦争やテロ、そしてコロナのように目に見えない恐怖が襲うようなことが続くと、世の終わりが近いのだろうか不安になります。世の終わりには、確かにそのようなことが起こると聖書には書いています。しかし決定的なのは、「荒らす忌まわしいものが席なる所に立つ」とき。そのときこそが、本当の世の終わりの始まり。でもいつまでも続くのではない。最終的には定められた破滅が荒らす者の上に降りかかる。なぜ破滅するのか。その日、永遠の義をもたらしてくださる主が再び来られるからです。

こうして見ていくと、ガブリエルは、主が十字架で断ち切られることから始まって、世の終わりの

時に再び来られることまで、実に壮大な神の救いのご計画をダニエルに伝えていたのだと分かります。ガブリエルは、「悟りによってあなたを賢明にさせようとして」と語りました。悟りと言えば、特殊な修行をしなければ得られない特別な知識のように思ってしまうのですが、なんのことはない、私たちが既に聞いていることでした。

### 3) なぜダニエルに明かされるのか

最後に考えます。ダニエルがこれらのご計画を教えられたのは、彼が特別に愛されていたからと説明があります。しかし冷たい言い方をするなら、彼は八十歳を越えた高齢者です。「障がい者や高齢者は生産性がなく、目障りで邪魔だからいなくなったほうが良い」と平気で言う人が出て来る時代です。そんなことを言う人にとって、ガブリエルがしていることは無駄にしか見えないでしょう。

でも、神のなさることに無駄は一つもないはずです。確かにダニエルは、このあと間もなく地上の生涯を閉じたかもしれません。もし、ダニエルが土のちりとなって永遠に滅びるのであれば、ガブリエルは無駄なことをしたことになる。でも、イエスは何をしてくださるのか。罪を終わらせ、永遠の義をもたらしたのです。永遠の義とは、永遠のいのちことです。たとえ障がい者であろうが、たとえ高齢者で死が目の前に迫ろうとも、永遠のいのちをいただいているのですから、まったく関係ない。だからガブリエルはダニエルに神の救いのご計画を詳しく告げる。

神は、私たちにもそのような目を注いでくださっています。地上で目障りで邪魔だと言われてのけ者にされ、十字架に追いやられ、断ち切られた方が、永遠の義を打ち立ててくださったことに感謝いたします。